



新著聞集



崇禎

馬

篇

三

從
至
九
卷

文
13
72

~ 13
1184
3



1184
3

新著聞集

勇烈篇第七

高田

高田

凶年と厭ひるゝて親子氷了没す

佛船和尚句と吐て賊と

鰥婦狼と害す

女夜盗と擒

童僕辱と過自害す

寡婦夫の奪集首

美麗少年義と思自殺す

愚夫童と誑て被疵

強力重擔耳力得金

信州高遠大蛇と斬害す

童子狼と害す

老父圍碁聞二子成

高田

虎勇威をばせる

讒を討身と立

幼年人々討義成

乞人理了伏して火小六

撫吏獲り上り大なる嘍と截害す

火不望て睡り熟し肝藏り毛と生ず

大鎗扇はくく弄ぶ

犬虎より不噬

至心火定身義不乱

壯吏自投遺書詩歌

高屋權太吏討倭者

積聚と截獲長壽

少年乃矢數

棟梁閣集



凶年と厭ひ苦て親子水了没す

天和乃と一先おはき、飢饉して餓成り者都鄙に

多し少しは戸あふ橋乃ほくくを時々徘徊せし

浪人となりし男幼きふと伴ひ橋はめりて糖と

そはくもせふふ暫く待べしそはめのみ橋の

よりゆきゆきとたも廻りて身を合せ浩く

波浪れ中り飛入りしと往來の人これハツくと云し

誰もて引揚るるもかろしとば遂りて水

底乃くくびとかりし良巧りて年高なる翁の頭ハ雪

と載き腰ハ了と張色々ろく瘦むろく右乃身ハ
數珠とろ左乃身ハ杖とけきいろほい素て
かの幼きをれを及てし親父ハいけろへせし
いしく携了り赴き往ま乃令了りあつて
そとハ自ら子にけしゆありも昔時ハ免られ此
世と憂もおのりぞ言せしけり我母ハ旬
かく幸き世ろたすもやろりしと悔言嘆し
ふくも所さから孫と連ぶし百がり不審
けりして遊と遊くろねきてまじしふぬハ
ふてま

しる暫く待てよ冥途黄泉まで親子此契争で
たられやとゆいも果下漫ろろ中に飛らし
えし人といし袖とぞあがりあり凡そい
乃衰ハ多かりしおぼろろをねのハ教ひ侍
じと也

佛船和尚句と吐て賦せり

上州大久保村乃龍雲寺へ天和三年十月に盜賊
入りし時佛船和尚頓て起出ぬい竹篋を持偈を説
今朝起出小龍窟 脚下分明十月天
凡俗不知之 一句白雲不礙四禪天

はま乃 歎乃がけりと云り此をがの者か始り
濃給とぬく取と飛かると捕へて公儀よりあつま
新へしはわたり頸刎らまうとまう

美麗乃少年義とたりひ自殺す

武府東叡山乃青龍院乃扈從喜平之十六年
ありしが容儀艶麗少くも心さぬいそやうありし
あつに河平坊刻る助少く顧慮し三位といふ
傍をたのそとさしく云りしうとま人の意はか
げりういゆとす義の及り入へまといふ文心せ

とせげりしるハ立之助のまうに堪ふに我部をいして股を
突ぬきて喜平とひそかたり拓まかくをらまといひめ
ゆとかもくごきまをれ心頓てかり袖乃裏せまう
破り綿をまら出し流る血を拭ひけりまよめて
あまより昼夜人あて忍び看病し瘡やうく愈て
後乃朝喜平紅屋の元日高まるて明けりしに
玉泉坊といふ納所ひてたきしり音もせは
何やとて戸を破りてえぬ心机よりまた眠り
君ありはなうとてとて立よる起さんとするに肌毛

脱(ぬ)げ腰(こし)一文(いちもん)を切り通(と)し地(ぢ)に埋(う)められ刀(やいば)を捨て置(お)き
死(し)ぬぬりり書(か)き置(お)き乃(すなは)ち一卷(まき)の巻(まき)をてやちり筆(ふで)して
朝(あ)すはれを浴(ゆ)す命(いのち)をもらふにたのしむたり(さ)るるの上(うへ)
こりしを助けぬるも嘆(なげ)きに堪(た)へず護(ご)國(こく)寺(じ)に
走(は)り入(い)りて我(わ)れ心(こゝろ)より出(い)でしるれり増(ま)す云(い)ふ置(お)き自(じ)害(がい)
せんとしあるを喜(よろこ)び平(へい)母(はは)及(およ)び親(おや)族(ぞく)きつあまふ
いひぬれぬ止(と)めしうむ力(ちから)なく髪(かみ)を剃(そ)り高(たか)野(の)山(やま)を
たがりちり跡(あと)を吊(つ)りしある寛(かん)永(えい)十(じゅう)八(はち)年(ねん)秋(あき)乃(すなは)ち
りあり

愚(おろ)敷(し)童(どう)を誑(たぶらか)して被(お)し病(びょう)

大(お)坂(さか)一(いち)獄(ごく)門(もん)乃(すなは)ち頸(くび)の首(くび)を切(き)りし時(とき)伊(い)藤(とう)丹(たん)後(ご)守(しゅ)殿(でん)
器(き)量(りやう)をあらそひんがして少(せう)年(ねん)乃(すなは)ち者(もの)を河(か)内(うち)光(みつ)誰(たれ)ち
かの獄(ごく)門(もん)場(ば)をすくす出て腰(こし)乃(すなは)ち物(もの)拜(を)領(りやう)しちるバ
らちる茶(ち)坊(ぼう)をすくす出て腰(こし)乃(すなは)ち物(もの)拜(を)領(りやう)しちるバ
ほりちんと云(い)ふしるはれはるる一(いち)腰(こし)をりしを
うとくかの取(と)りしゆき後(のち)乃(すなは)ち證(てい)拠(きょ)少(せう)くねりし
飯(い)と頸(くび)の口(くち)をりしに一の頸(くび)食(く)音(おん)しちる
多(た)すししもさるる立(た)ちかんとするをりしを

多向一きと云ふれを馬方をも急でつてつ
ふふ中し笑ひ嘲一了是非一馬出さずん
前ら負てつべ一こそ同乃者乃存好そ合を
糸糸とやしいは多希園張二筋もて怪く
馬もども怪らきう一か馬もそかくハ丁先嶮
乃取一つらふらふらふらふらふらふら
うらんとて馬乃書とひき端つつきけ
峠一つしう人とのきれとて人間乃取為にハ
じと恐ましとつり又はつりつりし時幅一
つり

奥へ三尺乃戸柵とあつらへ太き結渥と一
捧とせんとし四層三年守身乃回籠乃時
乃一筋教やつぎうに注め着陽のま
少ひつ多連着うて背負乃乃降とつき道
者乃まは左右へあはせと群集と押つ多
とつり森四郎左衛門と云ルハ書列一
し乃はつりして後回又ハと回取
は多たつといふそのあつり強力
及ふまうどとつらまがらぬも
しき力角又んを

人々取らるる耳と指しけりて中間より小判一両
とさし序耳といふ事判小判ねとてらん工ハ奥より
監入又奥えびんハてぬゆんべしとの約束りて所
又ハ今とていふより此方とていふに少くも勤
後よりハ又ハ腰より経ては多平人いふより
ひきしりど更りてゆがゆりしは又ハ負て金を出
あらしり

信州 高遠 斬害大蛇

信州 高遠より保科肥後守殿にりて時伊奈郡

蓑輪乃中大藁原より大蛇蟠君あるより鷹匠
頭井深九郎兵衛より組下より告りしをゆりて見
る事置べしとてまじく深く口入しに大蛇眠り
入り鼻乃音ハ付ていくるもくちくちくと忍ひする
難作より首せうらふくもれど頼たちやち地
かづつとき洞乃よりくみ化震れしは切口より
白き蛇乃立ちるが俄く天カキ曇り雷電四方に
ひくも雨大河よりゆすぶるも九多も集もす
それ大なるもくちい急き立ち下り少少乃坂下

ろくろく大蛇^{トカゲ}一^ト人^ト進^マり^キ来^ル今^ハハ
進^ルれ^ドと^トお^リい^ハ抜^キ設^ルる^カを^以て^ひく^ひく^切倒^ス
也^ノの^形も^絶然^ト一^ト人^ト今^ハ何^レも^ナし^ク漸^ク連^ル
ク^マ百^日を^サシ^テ快^キ氣^ト有^リ雨^登サ^シ
何^レも^ナク^三日^ヲシ^テ信^州一^國ハ^洪水^ヲシ^テ
取^ク損^ト也^ナ晴^ルて^好ち^の地^ヲ往^キて^その^頭
ハ^新原^ヲ所^ノ洞^ハ小^沢ヲ^所シ^テ又^人と^シ
よ^レ此^所登^ルて^恐ま^リ
童子^ノ狼^ト害^ト

丹^後岑^山嶺^ノ内^ニお^キ子^ヲも^子を^サシ^テシ^テ
狼^ノ乃^出ル^バも^シく^逃け^リし^ト葉^ヲ取^リ女^乃子^ノ
逃^ルて^し狼^ノも^逃け^マシ^ト十^一歳^ノ兄^ノ竹^藏逃^ル
お^ぢの^いれ^を取^テシ^テ持^テ孫^ヲ狼^ノ眉^ヲ
ろ^ろち^ろと^水あり^し鼻^ヲ多^ク切^リき^ク
狼^ハ嗷^ヘ子^ト一^ク振^テて^竹藏^ノ頬^ヲき^ス
く^いれ^し時^鐘を^そら^かと^咽し^てみ^引
し^は狼^もち^ちに^刻下^竹藏^絶然^ト一^ト人^ト
あ^ら人^ト走^リて^葉を^取て^しう^レ蘇^レし

麻平愈して後守護乃京極王膳正殿さこく
先して奇特乃者乃と出されしとあり

老父圓基二子の死をきく

藤堂殿の内より山岸喜太郎同弟左三郎そ
勇士ありしが大坂陣より兄弟もつらむ
父岩之助ハ老藤より伊賀乃上野よりつらむ
何れ日喜太郎を討て敵れ首ハつらむしし
鉄炮よりつらむて死しありし親乃もつらむ
きくしつらむし父ハ基とつらむし母もつらむ

かくつらむ来りしと個つと捕り父小つらむ
つて不仕合是非らむとつらむ云て基つらむ
あり相乃人先基をやめつらむといつらむ
たつと止つらむも飯もつらむ
何れつらむ口説つらむ
死しつらむ今朝塚めてつらむ
母もつらむ情もつらむ
何れつらむ岩之助のつらむ
家つらむ生もつらむ

或ハ定キ一ノヨリテ活テ入ルハ能ク仕合キ一ノ若
疾スベキ場ヲテ逃テカクハなげくべきものなり
そすすこしと噪ぐもきまなりしけし
ハ一生ノ鐘十七兩ナシ着ヤヅリし勇者に
侍ヤシ

虎勇威ヲ畏ル

大坂乃塚ノ能ク催スル一日に所しお
虎放ルニ出キ一ノ諸人鬼に
四角八方ノ逃チキあり秀吉公も
也

大名小名も周章一ノたき入りし
秀吉公伊達正宗加藤清正
虎ハいきほいからし秀忠公
椽ノ翔ハグロシキと
沖新と海ノりまあるが椽
二人膝とまてし
うあまハ勢出キ虎す
實ノ大勇乃威ノハヤク猛獸
のやちの感伏セ

讒と誅身と

田中筑後守殿能てし時中百姓がそて傍ま
乃袴下足かきまをる玉人乃用更はあおきて
只今乃る許免りまて懇懃了りせばすしそ
ろろいかにとてへ側らる人乃云ハ免りよ
サセ足踏でも踏てもろろいかに云い
堪忍りかして相手の方へゆきか様くれり
討早すへ覚悟りまてそのせうは何分にも
相心ゆいしゆへ此方より左右すべし

いさ書状調へ置てかの讒者れ部屋にけき不届の
おしきい云云切報し首を相手乃方へゆき
うれえゆへ能りる設り末期了り酒ぶんとて
三献りあち取へ大勢のあつる委細とき屈
る人了り訴へせば大了り感なきぬい相
果とべのび左様乃者ハ家乃騒動乃本
一族ぞも意趣とねへやるといほらま

幼穽人を誅義

田中筑後守殿家中の子もろろ合守市と

何れといひ十五歳なりける者七歳なる者の頭をもち
ありて何れも幼きそて士乃面せんとしりや
至るまじと詞を流しひたのくら四五日経て十五歳
者何心もかく遊ひ居るやするくと走りて
只一討つりきり報しつが家へ返りぬるなり
侍りしと親り告るれを親大りねとるき相
和乃方り返りしぬかの親は子の不覚なるを
さすのそびりつりて男の子かまの子をひく
家と流しせしつり侍りし一向り云いと彼子

きく届あつとと養子りせんといふは悦びかかれ
とも善りは多悪りつりて其子の妻とほひひ
ぬるのハあもつりじ士乃義理りつりてつり人
あつれを人をもつりて活てハ君られどそはあふ自害
せしつり

乞人理り伏して火入る
美濃郡上郡遠藤備前守殿城下の寺は普閑
りし相人雪乃日火葬しあり葬場
乞自人妻り借也とつりて同り乃はた

見付てはけりしやしき者かまひとてその供物と
奪いいくぐくの齧とらたもとんや由とにききも
しやしきも道れりハ成乃及なり地の中に
あつにけり余ハるるなきをさしけりし
ありとれハ乞自たちまち發起し返りし
所少くも巧くさき教化のいひも巧く比薦と
なせ合せたかろろ念佛し熱あがる火葬乃内
まひ入りしとあり

樵史樓より上と大なる嘔と截害す

泉州谷乃輪乃石守山の樓の根より河原の穴より
蝮蝎の栖とて人たそまそりりなりしはるはと惣と
し者此の樓の枝とちるしと薪とせんとおゆくと
をさしけりしとありしはるの巧くさきやとて木
れりし枝と切し一件の穴より嘔けりしとてよ惣を
目よりしと木より上とを待しと鎌をさしけりし
嘔め眉弓の穴よりしとちるん引りしとありし
倒しけりしとありしとありしとありしとありし
木も偃ししとありしとありしとありしとありし

浮腫と云ふは、しこり、ちぢみ、友達、く、く、く、と、流、れ、り、
ゆて、ろ、く、に、身、が、毛、髪、づ、ら、て、お、も、ろ、く、く、く、と、
も、頃、て、煩、づ、き、二、十、日、ど、ろ、ろ、と、終、つ、て、
き、毒、を、取、り、し、て、お、も、ろ、く、く、く、と、
き、毒、を、取、り、し、て、お、も、ろ、く、く、く、と、

望、外、熟、睡、肝、藏、了、毛、を、野、下

蒲、生、下、野、守、殿、家、来、乃、士、由、り、て、切、腹、す、る、に、
と、ぬ、い、檢、使、了、向、て、ワ、き、ハ、蒸、す、湯、に、
癖、の、所、也、亦、の、世、の、な、り、い、
鼻、を、し、て、良、久、く、寐、て、目、を、さ、
起、り、て、

檢、使、了、い、く、ひ、ワ、き、く、が、
生、り、く、し、り、く、し、り、く、
某、の、肝、了、も、毛、生、て、
て、切、腹、す、る、に、
り、り、く、し、り、く、
て、り、り、く、し、り、く、
大、鎗、扇、の、
松、平、の、
も、も、

幅、四、寸、五、分、長、三、四、尺、五、分、
大、鎗、扇、の、
松、平、の、
も、も、

と讀てあり風車軒くりりりやの後勝尾山二階
堂了りしもらるるがぬ日やとぞび思いらはし
るて火定了りへへへして薪の積を我中
香烟と出すと相圖了り火とあやも給ふと
世の詞も

せ乃ちとともいしてはる播磨山法乃るる
と讀て入りぬとりの念佛誦經の聲きこ
人の烟ととも火やう希に少く谷くろく冬
のりぢり同音了り念のいへいへいへいへ

寧て入りしに左乃より香炉とけあ石の念珠
とまらき行儀すも乱れにたて

壯夫自殺遺書詩歌

貞享二年十月了り兵庫湊川廣嚴寺へはれ流
かぬ若士まゝ来りて捕正成の塚や
見歩きして飯しる聖朝佛殿の側より林中の
たつき取了りて腹一文を了りて
或りし儂了り今も千匹香奠と
又一封の書り披き野夫を遺骸の故院

退屈し旧友乃媒りて牧野備後守殿へ召出り
きよみに極りし故七葉りかく告しうたふの
先約ありしおし又くその地程ゆりにてある
し由極りて好縁のありて柙尺出羽守殿へお願
へきり極りて七葉り告あれむ七葉内證より
出羽守殿への者り人様子ありと告ゆしり
指交ゆりてしきあやぶるより元禄三年
臘月百り七葉ありりゆりぬま細と堪忍
も是まてありし頭と二り討り留二刀あり

玄開り出て足袋り血乃付るそ脱こりし義黨
二人が弟出道りトマ刀ありとあれを鴨居り切
りてしや權太夫とありと据かへり只一討り
りし今一人ありし手と負せりかを跡も及ば
逃げりし權太夫ありしと裏門と出て蹲まりて
便と違せり取し七葉りかを義黨ありしや
うり出南北りかこりしお息つきりし權太夫
ありしやと名義しりし義黨ありし討り切り
伏し下りやと家中の面く左右りし巻り

追つて一足もゆめば長道具は細い
切りと手は下りて刻するもの少く手負者十餘
人及びし自分も多く病と蒙門番と招き
多くねり型をたつて野を走りししておろし
かゆ武勇いさる人の末葉と弱くぞ可見た
四代の孫とせしむしはなほしき振舞ふま
うとゆめ人といはるるに

積聚と截長壽攪る

阿州安東利左衛門といふ人の祖母三十三歳乃ゆ

甚く積聚するゆめりる看病の者れ隙をうけし
守り刀を以てしむ取て切り破り腸を引出し令せ
呼ぶくや告くは皆人驚顛頓て外醫を招
き腸を付し積をきり捨て則腸をたしあみ
療治せしむるふはわたり平愈りて半ハ葉まで
なほりてつしかの積ハ七日の男いづく動きて
後ハハ藟藟乃くくはりしとせ

少年矢數

石川備中守殿家の子梶川勝茂十三歳なりて

元禄十三年四月五日乃言... 翌日午...
了江深川三千三石堂了て半堂を射りて熱敷
一万二千二百餘本通り矢一万十本なりけりいふに
毛射ぬらん鳥色なりしりや矢師よりハ左小數乃
射りてハ引後了射手何方へ左方てハ我等
家職なりしりて強ち了押へくは是非なく
中し皆く至て至人如若殿及他小者りぬりよ
既了り平しと念りて極くめりて又
百餘本射過しとありと也至人斜りて悦ぶに

即坐了り百石に恩禄とぬりしと云

新著聞集

倭奸篇第八

機嫌妾語

偽金狂人自詐失言

輕蔑の少年即被殺害

佐土原の城暴逆殺傷

寶塔九輪下爲罐子

鄙俗命と損下

不貞の寡婦二盛二衰

狸人や妖一却て取

無根の詈言忽損身命

尾州廣沢親王

佐土海中題目妄説

本満寺像諍論異師

こぼろしめさねんとおひさしうも素了おま
して身の災くつりし

不貞の寡婦うらび聖うらひ妻

信州下伊奈郡下流村の庄屋七右衛門とよ者の家来の
市より女顔うらめてやうりしは誰人の媒ふてや
薩堂大孝以成り見へるに病も双方なくして
手具足よりとこし先衣裳れおしくよむり災を
しちり若世はいなきえふにや終るうらら中
りて古にうらりして又うらる縁ういきはくん

原半左衛門年よりお友らと素にま運られ候
所中一獣り娘と設しお夫重き病うらるる
後うら下腫もて終る身ゆりて後家にかりし
並岩村乃百姓一誘りま貞女れ心もうて沿ひ
りし小川の英お物をも皆代よかしはまて肩に
お春ハ鋤鋤とて耕や秋ハ種と推乃稻と刈
りぬ拙き業うら身とやけりあると也

金と依り人と恨み自詐言とりしう
伏見のあぢ屋毎日あ上りに何台付及く老人後

と迫の男女奉て詰でる任お日堪上人心切うし
あるお久保の人と先のお像了しひ法問の奥儀を
まつて若くは返答くば是かかを捨んと責くは
何の言へしかりし上人頓て斧とすうせし本像を
おろしおれし後の方より古狸逃出するを追はれし
討殺りしころん

輕蔑の少年即報害せしは

天和三年の秋吉良上野介殿子息三郎殿お察りて
追物の侍少坊をさかきつりし人形をいせしは

奥方より機嫌よくて悦ひしうして重ねぬおはら取
せし出されしと閑泳をとおしお者少坊にひひし
早しき者くまき君の者のま似てして賜はし酒肴
何の未よりありや武士たらし者の喰へきうは某を
人形かおもいしもまじと散くすう罰をさるはと
怪しむすの根藉やせおの思ひしやをひしぬ部で
誰よりむらからしし聖則のおうし法義隣の部屋に
ゆき餘の者もまりほのともりし一件の少坊をとも
呼て一盃吞やて又一盃としてめられしや清いは

終つじ碎てハ出さず一免く一處へとてせしめしに
深き氣の目人等一きりひらひと絶やけ取や
拽これ少くも呑内じまかめ責きれん力かく二三
献傾き一餘の者ハ破り一碎りて門入出
に急も云れぬる仕散す音の響し一在亭王驚
頓て走り出ぬの所一く侍やあぶく女抱せしをり
甲の隙一少場を沙葉が後うほりや
綴拾りて突ちりてあふふと云ふ急のせしりバ
亭王立戻り双の中と押ししも名ふ人てあま

出合に扱し一バ幸意ハ遂にまたよと員せし一幸
あまバ奥家乃親里上杉あまは後人妻りたり
立合少場を口書せしありに過し一日の悪口又幸
あまより既でくま手せ捏などせしと口惜くたり
かやも若年又ハ坊をりてりしはあまを堪忍し
作りしはるり今あまがかりしが隣の人又亭王
もねむせば故なきに余人一難をかあんなり
たあまいし隣の人痛く碎て飯りしや亭王返り
おぬ愛しや究竟の所と思ひ定て作りしし

ときて我を腰ぬきと云く堪忍ぢうがうしやて
切りかきとてあせとていかにあはして討くうひ
まうひとていふと願く取入浪人町中の謀ぎとて
翔はまうひとていふし小件方人血刃うすぢうと
あれをこいちらる故うマを遊よりるの要を思
心ゆくくと云ふはま道行でて遊く多詞をいふ
造竹もかく切はせ首を提立りてまあまをさる
る、此を新めりひよるこび怒りこれとてくし
我ハ喧嘩の相ひあまこハ切腹すしとて浪人日

地の幸ハ某うりぬくハまうし不利遠んと取りし
町人おるま推すめ奉行取うぬるま一とての許し
こはましくすめさ上へぬかひましや是ハ
喧嘩すしハ何う浪心なり何も新州のりうと
ゆえ何うて保りとり

佐土原の城暴逆殺傷

日向佐土原の城鳩津右馬頭殿今をとりし金
主殿あハ不憐乃心たりて兄右馬頭殿不鳩毒を
すくえぬりして遂に逝去ゆき嬌子飛弾

守殿家督受させぬし一又延宝六丁毒を
返りしきて卒し一ぬ飛弾守殿の嫡子又吉郎
殿ハ三歳了ておしせし一十八歳すその家督を
至膳後乃子息式部殿河内守とぬいづく三年
強て何る所之膳後家臣の松本左門とめりて又
吾帝名ゆのハ祖父より薩州ハ大隅殿の介抱
然る一式部少輔後見ハ叔父詮らきり也と
るまねを左門子進領掌一又吾家及家老
松本惣右衛門と招きぬいづおしし一ふや

祖父先考ハ兩君ハ既了夫セ所をいぬ今
君と國守と仰きまらるゆのゆも頼こすにし
主膳後式ア後心ひ強く國とむめ強ひとの千秋
萬歳の壽とまらしつとくぬれ子孫すてもし
つるべしといふ濃ヤと詞を結て述し一惣
右衛門以の介了顔色とくれの子實スリヤ
さし一也やぬし似合らりゆりる去りも天
罰乃逃まらぬ西くさる心強て止しぬ一惣
一後ゆりるをゆは密りゆりしよ人口外也



何れも一より憤るべきものにありし者數多かりし
かど各口を閉てやめぬ左門ハ程も又多きや
矢りんすとまかりしひいど相んまびりて
今又遠ざりしは祈願所の國貫寺に歸るる
思ひきりめり底了て又多きと酒伏るる頼
しうばとの傍れの氣息とえりいれもまきり
やむ女く領掌して則ち其夜ひも不薩摩に
こいあとの荒増訪しし了詳くふりしを
ぬいりる思ひや波傍に止めたぬいとありきや

興へさせぬ底了てたせぬふりし御朱印
改の式又改りて名を願ひありしは公儀より
けり不審とて大隅殿へ送るりしは大隅より
けり誰がやよとて穿議ありしに左門
る取爲りしは貞享元年にありて在る
入しを同三の公父子三人薩州よりし
禁獄に拷問させられぬ前束の積悪れり
りく白状のりて首刎らるる同年二月に
薩州より佐土原へ何となく諸士ありし

翌朝之始、後、奮、登、了、出、ら、ま、し、と、諸、士、取、巻、て、
ほ、め、候、切、も、世、間、へ、ハ、頓、成、と、披、露、せ、し、或、多、の、
近、從、六、人、も、薩、州、了、り、ま、り、く、首、加、ら、ま、し、
佐、土、原、了、り、て、左、門、を、矯、三、部、め、弁、及、し、三、美、と、堀、守、
め、ま、り、し、り、と、ま、り、ず、し、て、左、門、を、館、了、り、籠、り、し、
う、は、足、輕、三、人、了、り、急、き、め、の、者、と、も、と、討、取、り、の、位、に、
急、り、城、了、り、下、る、ま、り、と、左、門、を、極、め、の、中、に、う、り、と、
突、り、て、ま、り、と、射、殺、し、換、炮、了、り、て、又、ま、り、の、胸、
中、に、あ、ぬ、も、後、ら、り、僕、從、了、り、り、り、て、共、了、り、ぬ、

す、り、と、數、多、の、勢、も、取、り、ま、り、し、り、と、戸、板、を、ふ、た、
以、て、密、に、く、り、し、し、命、と、ま、り、に、防、ま、り、戦、に、ら、り、容、
易、了、り、責、が、り、て、火、矢、を、放、ち、燃、り、り、し、り、バ、防、ぐ、
へ、き、便、り、り、り、と、急、に、猛、焰、の、中、に、倒、れ、死、了、り、男、
土、井、七、人、女、子、七、人、出、家、二、人、居、一、人、都、合、三、十、七、人、同、
一、煙、に、り、り、り、り、大、坂、天、使、の、ま、り、場、了、り、大、記、と、
り、り、候、り、り、佐、土、原、乃、候、了、り、て、件、の、悪、逆、ま、り、
り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、
強、ち、り、り、の、地、り、り、呼、下、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、

安穩^{あんゑん}すくすくせむらく毒^{どく}すくめて報^{ほう}す
あり又^{また}洛東^{らくとう}南禪^{なんぜん}寺^じす左門^{さもん}が弟^{あに}に傍^{たがひ}たりし
大坂^{おおいさか}薩摩^{さつま}の益^{えき}屋^や安^{やす}す内^{うち}まで兄^{あに}たりし者^{もの}乃
重^{ぢゆう}逆^{ぎやく}して勢^{せい}後^ごあもしく減^{へん}すむひりうハ
甚^たも通^{とほ}るべきなかくしりし合^あ罰^{ばつ}りせ
くやうりもれをぬまのいしく支^しすハ沙^{しゃ}門^{もん}の
うれを治^ちて構^{かま}るべきりハゆきも一^{いつ}生^{せい}國^{こく}
が相^{あひ}まらひはあうり左右^{さうぶ}すべきとつりしうは
その夜^よ邊^{へん}りき納^な屋^や下^{くだ}りて自^じ害^{がい}せりかきも

茲^{こゝ}に京都^{きやうと}へ送りしは地^ち邊^{へん}りし

尾州^{びしゅう}廣澤^{くわうさく}親王^{しんおう}

尾州^{びしゅう}松平^{しょうへい}出雲^{いづも}守^{まも}殿^{との}屋敷^{やしき}の海^{うみ}邊^{へん}り廣^{くわう}沢^{さく}角^{かく}兵衛^{べいゑい}と
貞享^{じんきやう}元年^{げんねん}の春^{はる}卒^{すつ}すぬ息^{いき}平^{へい}九^く郎^{らう}八^{はち}十^{じゅう}三^{さん}歳^{さい}すて
儒^{にう}とまひ教^{きやう}と讀^{よみ}手^て跡^{あと}拙^{せつ}り心^{こゝろ}也^{なり}後^{のち}逸^{いつ}ふ
しこころは障^{しょう}りりて親^{おや}の忌^い中^{ちゆう}より一族^{いちぞく}
不通^{ふつう}りしと却^{かへ}て幸^{さい}めりにはりし若^わき目^め袍^{ぽう}と
りりめ海^{うみ}宴^{えん}歌^か舞^{まひ}す日^ひ存^{ぞん}と和^わりし十^{じゅう}又^{また}菜^{さい}すて
糸^{いと}の長^{なが}み入^いり守^{まも}り疑^ぎひ無^な双^{じゆう}乃^{なり}英^{えい}武^ぶりりす

大人の相取り然るに茶道信人の萩野柳意と云
者此の出入せしむる時竊うり乳母ふ泣り
しハ平九郎の御母ハ院乃官女して津膳胎
つりせきり御母ハ院乃官女して津膳胎
所ししうり御母ハ院乃官女して津膳胎
吏婦スつり御母ハ院乃官女して津膳胎
九郎をより高ぶししうり御母ハ院乃官女して津膳胎
つりせきり御母ハ院乃官女して津膳胎
のく美麗や好より柳意頓て竹腰

龍之介乃系乃青木宗智と云い進付大内より
清いひもく披露し預り也道具と拵り
ハ金銀の茶碗同く黄若盆黒ぬり四足の長柄狭
箱梨地乃長刀の菊桐乃紋と付し冠
衣その外諸色品とと下への器物衣類と
まて受しし平九郎で光仁親王と号し
宗智の姪の十歳より御宮様として槿の前
と名つり宗智の弟門前町の古著買七右衛門
と挑園中納言為細く名つる乳母の所縁の者の

伏見よりしと御後見權大納言より柳意と
正三位中納言行爾と名つる宗智と三位法印
安齊と名つる宗智弟青木惣十郎と左少弁と
し宗智妹婿乃上畑町の絹賣藤屋平兵衛と
右少弁と名つる比面等以下諸役人もそれ
よりしは皆金と伯父の齊谷甚左衛門と付
近年不通のようもなると捨置かしてと妻細と
亮中へ訴へしうは竹腰龍之介家来竹腰宅と
かへ行啓ありていととき餐食せしととらへ

足輕大勢馳せかこ見えなくと生捕親王と龍之介に
清河の事ありて板かこひたり柴乃幕と張まひく
番人より付くぬりしとれ時乃歌たり
思ひまや八重の山と云は心之て今九重の君とるんは
柳意宗智の手鎖りて残る者もハそれ所くに
河頭多河りし柴山外記より抄とて京都へ詳
らりし清河の事とて妻と事議しとるふと是こ
柳意の謀計より窮り親王ハ山村甚左衛門にて
切腹柳意宗智とれ余の者もも宰舎より首と

加らき尸骸ハとまゝくすし寺へ下りて宅を
之切腹森佐兵衛と云ふ者も取持し之切腹
せし女もハたつて返被りし
宝塔九輪下て鑑子と云ふ
石川玄叟後信州松本に在りて王子の宮に
の宮ありて建りて宝塔の九輪をたらし鑑子
を鑄させられしより塔ハほろろ破壊し
今は無居の振廻りし故に之を馬と云ふ
家ほろび歸りし

佐渡海中題目妄説

日蓮上人佐渡流刑の時かの國松が嶺と云ふ浦にて
妙法蓮華經の五字を浪り書しぬりし今に波の
面りありてまじしとの宗の僧俗はのにおはれ
不審くおりのりある時國のまじりておはれし
舟根多き來たりしに
痛々しく詮義と遂しと更なりしなり
ゆゑに宗首の輩に
うんく云ふなり

鄙格命と損了

江戸村木町よりみゆとよ者ハ甚格く巧しし
長病了して不食せしむと焼垣のかが更了り
喰けりしと妻のまうりに悲しと鯛を濁して糶
せしとみゆ又てときらん何国より来れるそ
幸又了て求しと人の心どのの救う可なり
と散く了り書しと隣の妻のすて件乃
魚を買取しとみゆの病喰せしと二切し
みゆの病とみゆ自ら喰あるが何とてして甚

つてらと絶たすちやうにるしは醫師来て
解と口より入るれども毒と嘔みたりて明は脈と
るつへは怪しして目の中も冷しやうし
了りヤと思案しとちやうに妻あつて病入る耳に
口よりせいのうらハ振すひもふと云ハ甚
つて口より吐きて吞りマウら然もども
業用いざらハ絶えりよぬ詭令三百兩
と後家子とほれと縁より付るる地

本満寺像評論異師

洛陽本滿寺の日蓮の像ハ靈驗〜に何〜
同宗の崇敬はつた何の内像すじ損
きふて佛師と呼しし佛師といふ像
日蓮の像を改めよのりい何やと問ハ修持ハ
あるにて弟子同宗の若法師何もあ合何も
文蒙る佛師乃云る厚もけ影ハ北山
芥子の望の土中に久し法華經讀誦の聲
何し〜に寺の開山聲と云べ〜堀〜
何のりや大聖人の像了てたハ〜知何を

ちう教〜に大悪人〜散〜
佛師堪〜に各〜に
し是ハ何〜元三大師乃影也〜互に
口論〜て餘多の法師佛師が頭〜
損〜を内證〜て事おさめ〜
牧野佐渡守〜に佛師
アす〜證拠何〜宣ハ佛師〜影
何首と破〜て了〜良源と〜慈惠と〜記
何〜若日蓮〜何〜首〜

又修めりしりふ問せむは一言乃返答なり
し中其方より醫師より多病治せさせよ
職人のよりふれど其日數と積りて名代急度
りしりふし擲ききぬりしり内證より佳言
— 白銀二十枚たくりしり也

新著聞集

宗厲篇第九

龍宮城と語て暗啞乃子と産
慈眼大師恭敬りしりと罰る
安宅丸の精穢しき人の踏りて罰る
柳津の比の魚と毒殺す
祭酒了碎粒す
佛像の釘と掠めたらち四指と損す
佐今谷乃稻荷の神本と伐

神本と商んと欲して材没く人死す
愛宕と凌蔑して餓死す
釋迦の像と詈て顔格子に附く
蛇と殺してまらち死す
天満宮と廢して七代早起す
祇園御葎の祟
古碑と礎とからし霊魂憂ふ入る
蛇童子とくひ家族悉く滅す
天神の池の魚と捕獲熱して死す

庚申祭の夜幼焚入て死す
日待了ゆ誓て子焚と被て斃す
冬宮の者鹿とくひ身を終ちめて肉食す
惠美酒神石とくひ竹と枯す
高野大師の命了背き火災
曾我の神祠と輕蔑して狂乱す
愛宕の境内と横領して火災
問者の役と拒て脊に腫と患て死す
女人高野山了詣て害せしむ

大入信輝... 龍宮城... 遠州天流の川筋... 鹿嶋村... 龍宮城を語て暗啞... 遠州天流の川筋... 鹿嶋村... 龍宮城を語て暗啞... 遠州天流の川筋... 鹿嶋村... 龍宮城を語て暗啞...

龍宮城を語て暗啞

遠州天流の川筋了鹿嶋村とんらもれ海舟の
おれおろしとて同じ継の松尾村の平野古妻と
いふ者さし小川中つてお勤らびりしうたな
色とりしらし君あつて何とありにや古妻お
うり飛と水底つ洗しおハヤとくと
向の岸に忍ぬはる古妻が宿つてすて基く嘆き
しやとすまき海らて身目を送り既了三回忌の
追善や一財何とらかのお妻入ぬりしうたな

と人々驚き若狢狸の妖怪了やとためしに
何の不審もきりもかたりしに成留く安堵あり
其の由を問ししに亦もハ其何れもろく私より
て竜宮界より入りぬ竜神のつがが力と頻りに
まじりて極まり論合て涙を流ししが彼よてハ
一ありと極まりしに極ハ三の強よりありにやと
拍子り龍宮のりいなる主人の問もあつらひ
語りのゆきし堅く制せらるし初ハ云はり
しが道まかりにりりしと流ししと也

其のち産子も兄弟なく啞にたりしハ
かの界のり語れるなりヤ其の言交ハ卒歳を
了て天和ニの今も存命ありし

慈眼大師恭敬の事

江府東叡山了て兩大師の像天和三年五月に
等覺院了りしに也
恭敬等も海めりつて二三日も
召仕の僕了り物つきねし出我ハ是慈眼大師也
げらび當院了りて元三大師評語きしめり

也のゆへに院を粗畧す。しては、何の辨へ
もなき小僧より。沖蘭をせり。諸人の
信心も。うきうきぬ。これ清き。叶はれ先
大師。了。何の清き。おはせ。此れ先。自見道。
了。成。が。と。怒。り。多。く。怖。れ。は。し。こ
早く。清。後。と。何。ゆ。め。沖。蘭。おも。老。筆。と。い。して
物。れ。く。了。叮。嚀。了。恭。敬。せ。り。は。物。の。つ。ま。は
夢。の。醒。る。に。本。性。了。り。ぬ
安宅丸の精程くもへの踏らで言は

天和年中。安宅丸の清紅と由きて解ひ。きて
せ。れ。く。了。拂。お。す。か。い。ぬ。ひ。に。柙。原
和泉殿。橋。乃。ほ。布。衣。と。以。者。板。と。買。求。て。穴。齋
乃。了。了。と。も。る。に。其。は。め。は。ひ。の。女。お。つ。き。て
我。の。れ。あ。丸。の。竟。う。り。暁。り。ら。く。某。と。定。る。乃
蓋。し。程。り。き。程。人。原。す。踏。せ。ぬ。を。意。恨
な。ま。こ。と。す。取。殺。さん。と。言。り。亭。主。は。ら。き
い。そ。き。作。り。く。中。と。ん。と。改。と。き。ま。き。倭。言。せ。り
う。は。物。附。は。さ。め。け。り。し

柳津の比の真と毒殺す

出羽の國柳津の虚空蔵の地へ鮮魚おびきしく
ありし藤生下野守のふさむひくひらつて
毒を流し入殺す一とありあれど是ハ佳たり
穀生禁めぬの地ありし一連ていさめ一かど候ふ
承和一一あらず悉く殺さぬ一此の日より十四
日一宇大地震心だりし一山ハ崩れて洞あり
河ハ干ひて陸となり山中より民屋こぼれ
廢頽して人多く死に是より程下野

家ほろびる多しハかたはたどりあるや

祭ほり群ねす

江戸下谷の者上野の大師より三日三十一

りくくとも三は色もあふりきりも吞てけりし

候へりねれ一大師のりきりしはうせりるあや

まへへり口ぐり一まあるとかん延宝八ののや

佛像の打とけすあ忽ち四の指を損す

延宝八の八月廿八日是の大佛の入佛供養の

しり大日如來のりしるの打とけりるま

宗心とくろ道心者像の腹肉よりおのび入り針の
かいら四つ出ると後礎よりてうら曲拔るんと
てかど叶ハ振りしうは腹とまて出たり
堂の上より不忌村末落りて指二本左右より
しらひききり花も怪家ハ老々りつりしるま
こそ針四本ちりみ指まて心家也しも不忌村なり
佐々谷の稻荷の神木を伐
あうら佐々谷のいづるもの所當ハ庭の谷の佐々谷
とよ者の象なりしうは社内神木れ老をけり

きると怪もちく多く切りとまて身付物としるに
頼てはとがめつるふして妻子よりにおまじり
せれづる憂るちりる老年は母は少く邪見放逐
あして後世のり憂ふもあざりしおろる所三
りちる孫と切てえせよやつりちく責たりと
佐佐木何と思ひ事り不や公認して地をてを懐に
孫を切てええよ身とつりちりねを老母何ちる
我もひり一人の下ふハを成りし解あつしき
ゆるくてハ常士とハ云がしとて返はく収まり

享百萬遍回祿（ひやくまんへんかいりく）して後（のち）之（を）東河原（とうがわら）に移（うつ）す
一（いつ）付釈迦（しやくぢあ）の像（ざう）大佛（だいつ）之（を）法華（ほっけ）で（を）と（と）經（きやう）を（を）讀（よ）む
と車（くるま）了（りやう）して牽（ひ）る（を）う（を）日燈（にちとう）大納言（だいなごん）殿（の）お（を）も（を）捨（す）す
ふ（を）教（しやく）珍（しん）如（に）く（を）ふ（を）ふ（を）い（を）あ（を）る（を）親（おや）也（の）の（の）首（くび）を（を）引（ひ）く（を）
ふ（を）若（わか）め（を）さ（を）れ（を）く（を）細（こ）ら（を）り（を）に（を）その（の）ま（を）に（を）教（しやく）捨（す）す
り（を）け（を）て（を）雜（ざ）き（を）ぎ（を）れ（を）ハ（を）大（だい）ろ（を）お（を）ろ（を）き（を）ま（を）く（を）儀（ぎ）言（ごん）
ま（を）ふ（を）し（を）く（を）儀（ぎ）く（を）離（り）れ（を）忽（たち）ち（を）日蓮（にちれん）宗（しゆ）を（を）け（を）ふ（を）
百萬（ひやくまん）返（へん）乃（すなは）ち（を）善春（ぜんしゆん）院（いん）の（の）檀（だん）那（な）と（を）か（を）り（を）ま（を）ふ（を）し（を）
釋迦（しやくぢあ）堂（だう）ハ（を）す（を）ら（を）り（を）大納言（だいなごん）殿（の）ま（を）た（を）建（た）立（た）し（を）ま（を）ふ（を）し（を）也（の）

館（たか）を（を）報（はう）し（を）て（を）忽（たち）ち（を）出（で）す

出羽（でわ）の（の）國（くに）最（も）上（じやう）源（げん）五（ご）郎（らう）殿（の）菩提（ぼだい）所（しよ）童門（どうもん）寺（じ）の（の）鎮（ちん）守（しゆ）
ハ（を）龍（りゆう）了（りやう）し（を）て（を）竹（たけ）の（の）う（を）く（を）古（こ）り（を）り（を）云（い）つ（を）し（を）て（を）乃（すなは）ち（を）名（な）別（べつ）館（たか）と（を）す
乃（すなは）ち（を）不（ふ）恒（こう）常（じやう）也（の）也（の）人（にん）の（の）集（しゆ）り（を）ま（を）じ（を）し（を）て（を）
ま（を）く（を）見（み）る（を）所（しよ）を（を）了（りやう）す（を）宅（たく）寸（すん）字（じ）の（の）館（たか）の（の）出（で）る（を）し（を）と
追（お）い（を）ひ（を）り（を）て（を）報（はう）し（を）て（を）あり（を）し（を）て（を）報（はう）し（を）て（を）者（しや）と（を）も（を）た（を）ち（を）り（を）
眼（まなこ）を（を）立（た）取（と）り（を）て（を）疾（しやく）く（を）ぬ（を）る（を）の（の）進（しん）む（を）る（を）也（の）ま（を）も（を）
み（を）ま（を）す（を）日（に）を（を）り（を）煩（わづら）し（を）て（を）也（の）其（その）切（き）る（を）ち（を）明（あ）太（た）く（を）し（を）
四足（ししやく）あり（を）百（ひやく）八（はち）金（ごん）く（を）珍（しん）し（を）る（を）家（け）の（の）館（たか）形（かた）を（を）て（を）し（を）

地の成蛇今うう江戸浅草の向の慶養寺より
始りたりしとあり

天満宮と廢し七代早逝す

八條宮の桂川のお業くく入る西恩海田打あり
新殿のりしるる丘林の中よりむしより天満宮
乃祠しとせしむふ心より宮のりるめりて
日蓮宗より傾きむむく彼祠を破りて地の
跡より三千五百社堂を建立しむりて天満
宮を枕より立せかく廢社せしむり崇りたり

せんとぬしとぬふと驚きみまのあつて
造る所よりぬれと更し神無きゆきりぬハ
りししは法隆寺のためと家名と常磐井又と
系統くつとちきぬしとむねも心りし神合
七代より子孫しとぬしと

徳園中庭の崇

尾州津島戸田近所の天王様を
りりり八子八女は疫神と庭の中より封し
川へ流す其より内なる疫病を

山崎のくはなは古良あり成ぬを言葉ハヤシ
をり燃して後まう起るしをれどまう
うしとまう言して一と経て成る

古碑と礎とを霊薨入

奥州二本松の業研や久心とり者庭を流るて
回廊の安念寺乃山ろ苦生古ひより石塔を建て
踏石をかきまわが甚はより恐しき夏とるふ
しゆくわししり内を度やに若き女いし
姿りてまう我久しを任るれし取て流段

走へハ何とて連まれまると怒れる眼はれま
しき胸ら喉が口忙然として良なりて人
不ゆぬけの恐しきとまの道りて流る
所を老人のくけしを石ハ半年必おる島山重改
と云し人の娘十七八つて身取りしと葬し石
塚をりしはくまじしやる凶悪ハその業はしゆるん
まくなのまらう運されしとけしまう運る
せしより夏止し延室子中乃る也

蛇童子とくし家族悉く滅す

伯母は身下り玉のまゝに一族七十余人をひくす
刻しう教養をうししけりといふ聖人の此十八集
りて成て遊む阿州へ来てかきし

天林の比賣とてうへに發誓して成す

江戸を新妻樂寺へ東条成を衆とて人抱ひて
来りて比乃魚とてしと社僧の信祐より役立て
神お乃池魚の根蕪にまゐるひくまゝに人
ハ初生ぶししとてうへに理をほりて云りしと
報生妙法の控ぶくにせすハ許しとて思ふ

江網よりし晩く及び海に網を引着堂儀
撥くつて神お乃魚の憎くやまらうマ
りて身下り玉のまゝに武を衆も大に發
誓しう教養をうししけりといふ聖人の此十八集

庚申祭の夜勿誓り入て成す

江戸末役所二町目よりしお言師の娘を衆が
おろし庚申待しとらうり店の者の妻正業になる
子と連て来りお食の女供かきし侍に大なる
御り業とてしとてしとてしとてしとてしとてし

く作りしとあり

三輪大師の命をむき火災

三輪山の麓天竺のむしを余乃者伊勢より

と公けりて百日記別して垢離して日數を

やりや重りしに俄く垢離して垢離して

走りぬり吾ハ山乃大師ありは空の者なり

耶見放逐してして佛法をきび禁して

山々歩と運ぶるもかくと雄略利欲乃の

不れもいとありを哀れむいなり今より後

少く信とておと云くは村乃者どもありありて

是ハ拙り狸乃付るべし鼻をすべよ犬小掛

よりく云言するありかの者大に嘆てぬ

大悪人ありおとよしてに大悲を念ひにん

けりハいんをやいてま依りハま身中旬

付本と黒土アアかいておひあせんそれ時悔た

半世のありをてて云てまのくきと出

人々涙を付て笑ひりてけり俯伏して

絶たしありを良ありて獲まりて

みのまはりのごとく寂しし御乃垢離のりし
言燈流るる若き傍の水と越毒し身入と懐し
くたし入る神よりひと抱はるまきく後を
多くすと流るれまきどのりしなる忠告にも
猶ほらるくるのりし地の次の月十六日一
一村悉く焼失しゆり彼垢離のりる家不
やりの障りらるるまき寛永十三年十月の也
曾我の神祠で輕蔑して狂乱す
曾我兄弟乃祠ハ富士乃下野了りしに神体ハ

兄弟のちり本尊れ弥陀の三尊ちり兄弟の影像ハ
前立了りてりしとゆり上杉の家位在り山陰
燈籠し奪いさるるまき今ハ兼次乃福寿院了
りり然るるを此かの邦乃信行不忌ね毒しとら
射るま似しとせの麻ねがすらわらくまきとゆり
まきもろとゆりらるるやと法湯とすめて謹言
まきちバかく大切なり神祠で怪んと茂ふすい
りり崇りい海しわらふとゆり人とわらふまき
海のまきくは守り了りゆりまき

愛宕の境内を横断して火災

愛宕山の山頂より水尾村より堺杭を愛宕山へ折
りて折ししも愛宕の傍に合して是れ寺にあり
かくて焼くもハ惣坊を合しての村に候とせしむれど
折れせぬハ折目板倉周防に候と訴へしとしく
穿議のりまゝに折の村の長本に候より火にたり
如して同意せし人の家より火に飛火して
焼失せし一箇に折れしびりしも不同意の者ハ家
より何の恙かありしと也村の者もいふに貧者

件の事ハまゝ何れにせしに佳言して止し

問者の役を拒て脊に腫を患て死す

愛宕山西南院良尊ハ博孝弘也の人としてたゞき
りて折れし院の僉議の節に及いし人問者に當
りて折れし一箇に折れしとせしむれど
まゝしはしむの問者といふもいふまじれり
塔院祐也と云ふ良尊ハ若くは若くは
明神来臨しと云ふ大師をたりにていふものハ
全代の孝返りていふも命助ありと云ふ

明神の宣く貴坊とおぼしめて問答にたす
能くおぼしめてたす京のうゝ見小姓せりま
日本國より河内海の大切の山の糧とす
費をその甚非道のゆゑ今助けりて
大弓引はぐひ射をまふふと思ふ人夢えぬ結
毛驚きやうして長尊を訪きありに候り
背中に腫物いせきして二三日乃に遷化せ
り

女人高野山に詣て害せり

寛文六年八月廿日越前よりと文順礼を望心と登り
して道掃除の者なりとめ爰ハ女の来る所なり
とくく飯らまきよと進中ししくおまぬるの三度
にびびりておま入り登山しありて谷云隔
く向いの嶽乃松の枝をかめ女を引きて懸て
し次の日又出く頓ておろし一葬しと三度
目取つたあしして法性院中へぬびく喜れり
かりと念じりてしひぬりし何のゆゑ
かろしとぬ風ぬをく及下りてバク損し

あつしつとて



Handwritten text in a cursive style, likely a letter or a record. The text is written vertically and includes various characters and symbols, some of which are partially obscured by the red seal.



